

平成 17 年 10 月 30 日 賀茂県主同族会祖先祭記念講演（於賀茂別雷神社勅使殿）

## 「歴史研究から見た上賀茂神社の特色」

岡田精司

### はじめに

私が関西に移り住んで、神社史に興味を持ち始めて間もなくのころ、一もう四十年近くも前になるでしょうか。こちらにいらっしゃる藤木保誠権禰宜さんのお父様の、藤木保治禰宜様を、大学の先輩から紹介されてお目にかかったのがご縁で、それ以来たびたび参上して、ご教示頂きました。うかがう度に、この伝統あるお社のことを詳細にお教え頂きました。関連の古書はいろいろ目を通していても、理解できない所が多いのですが、由緒あるお社の神事の実務に携わっておられる方から、直接ご神域の中でお話をうかがえたことは私にとっては、実に有難い、学問人生の転機となったともいえる出会いでありました。

各地の神社巡りを本格的に始める前に藤木様とお会いできて、古代以来の神社の最も基本的な形を伝えている、賀茂別雷神社について最初に勉強できたことも幸せでありました。

実際に研究しはじめると、賀茂神社には思いがけないほど古い、日本の神祭りの姿が残されており、その魅力に取りつかれてしまいました。調べるほどに、底の知れないものを感じております。

### 1 賀茂神社と神仏習合

さて、二つの賀茂のお社については、調べてみますと、ほかの神社とは大きく違う所が多く、古代以来の祭りの形をよく伝えた珍しい、貴重なお社であるといえます。

古代以来の祭りや神域のあり方を伝えている神社というと、皆さん方はすぐに伊勢神宮を思い浮かべることでしょう。しかし、伊勢神宮というお社は本来は民衆が誰でもお参りできるお社ではなかったのです。

元来、伊勢神宮は天皇だけの唯一の守護神でありました。年間に数度の祭典にも、神職の他には齊王の皇女や神祇官の役人たち、それに勅使（天皇の使者）たちの一行だけが参列して、ひっそりと挙行されたものでありました。

平安時代までは皇族や貴族たちでさえ、勝手に神宮に参拝・祈願すれば、島流しの罪と規定されていたほどです。この制度は「私幣禁断の制」と呼ばれて法律上も厳しく規制されていました。まして庶民が参拝することなど全く許されないことでした。

古代律令政権が衰えて、武家の鎌倉幕府が開かれた頃になると、御師たちの活動が活発になると、上級の武士たちは各地を巡り歩く御師（下級神職）を介して、個人的な祈願を

して荘園を寄進することが盛んになります。しかし、本格的に民衆層のお伊勢参りが一般化するのには、戦国から江戸時代にかけてのころになってからのことです。

一方、京の賀茂神社は、奈良時代はじめの頃には、すでに祭礼には山城の国内だけでなく、近隣の国々の群衆までもが矛や刀をもったり馬に乗ったりして勇ましい姿で参集し、律令政府から度々禁令が出されているほどでした。

二つの賀茂神社も、平安時代からは御所の護り神として崇敬され、伊勢神宮と並ぶ朝廷の重要な神社とされますが、本来は山城国の地方豪族、賀茂県主氏の氏神から発展したお社であります。国家や民衆との関わり方は、伊勢神宮とも、一般の地域の神々とも異なるもので、独自の由来を持っていました。

賀茂神社は下・上二つのお社からなっており、それぞれの特色がありますが、今日の会場である上賀茂の別雷神社に限ったお話をいたします。

ご存じのように、上賀茂神社は神域の北方にある神山を神体山とした、山岳信仰から発展した神社であります。全国には神体山の信仰を基盤として発展した有名な神社は沢山ありますが、それらの多くも中世以降は、天台宗・真言宗の本山寺院の支配下に置かれていました。

賀茂神社においても、中世・近世の神仏習合の時代には境内に塔も建ちましたし、社僧たちの神前読経も行われていました。しかし賀茂両社が他の神社と大きく違うのは、神職と寺院の関係です。天台・真言の本山の下に組み入れられることもなく、神社が独立し、神職は神宮寺の僧たちの上位にあつて、独自の序列で組織を維持してきました。

神仏習合の時代には、多くの神社で祭祀の形態も、神事・行事も変更せざるを得ませんでした。山岳信仰の神社の場合は、それに伴う本来の祭祀の形まで変わっています。古代のままの神事の姿をきちんと残しているお宮は非常に少ないものです。修験道の行場変わったところも珍しくありません。

近畿の一例を挙げますと、近江国の三上山（現在 野洲市）も奈良時代の書物にも登場し、延喜式神名帳にも名神大社として載っている著名な神社ですが、三上山を神体山とする麓の御上神社の本殿は、中世の阿弥陀堂（国宝建造物）そのものであります。ここも神仏習合により変わってしまい、古代祭祀の名残は全く留めておりません。

そのほかにも、各地に伝わる古代以来といわれている祭りの中にも、再検討を要するケースが少なくないようです。私は全国の千社以上の多くの神社や祭りを拝見して廻りましたが、室町時代以前に遡れるような祭りも、神社の形も滅多にお目にかかれぬものだという感をいっそう深くしております。神社も歴史の流れ、社会の動きとともに絶えず変化を続けてきているのですから、当然かも知れませんが。

そのような中にあつて、賀茂のお社が、古代の祭りの形を今もそのままに伝えているということは、全国でも珍しい貴重なお社であります。

こちらの上賀茂神社で、深夜に葵祭の一環として挙行される御阿礼祭は、神山から神霊を、緑の森の中のヒモロギ（神霊を迎えるために、常緑樹の枝などで作った設備）にお移

して始まるこの神事は、古代の祭りのあり方を考える上で貴重な手がかりでありましよう。

それにつけても、先代の藤木禰宜様から初めて御阿礼所をご案内いただいた時の、驚きと感銘が蘇ってまいります。

## 2 日本の神の祭り方

こちらの上賀茂神社の特色としては、古代の祭りの形態を今によく伝えていることが、第一に挙げられるでしょう。これほど朝廷や幕府とも深いかかわりをもち、古来、都の著名な神社であったにもかかわらず、古代の神祭りの形態と雰囲気をよく伝えていることは、奇跡的であります。一方、古来一貫して地域の民衆信仰の中心でもあり続けました。

多くの神社は、中世以来、著名な大社であっても神仏習合の世情のなかで、天台宗・真言宗など、宗派本山の組織に編入させられて、祭りも、境内の景観も一変しております。当然の歴史の流れではありましよう。大社の神職団で仏教宗派の本山の直接支配を免れていたのは、全国でも伊勢神宮と賀茂両社、出雲大社など極めて少数の神社だけでありました。

伊勢神宮では、神事も建造物も、古代の姿をよく伝えておりましたが、明治維新の「神宮改革」によって、内宮・外宮とも、社家の人々全員の追放があり、また維新政府の方針によって、古来の年中行事も祭式も、大きく変革されてしまったことは、何とも残念なことです。それに対して、二つの賀茂神社では、あとで申し上げるように、社家の同族の方々の結束によって、祭りを中心とした伝統、古社の姿、神職団の組織などもよく伝承してこられたものと感嘆します。

今ではほとんど失われた古代の神社と祭りの特色とは、どのようなものでありましようか。古代信仰の特色を箇条書きにしてみました。

- ① 神は人里には住まない。祭りの日だけ降臨する。人々の前に出現する時は、人や動物などに乗り移って現われる事が多い。
- ② 自然崇拝が基本であり、山でも水でも、動植物でも、あらゆるものの内に神霊が宿っていると信じていた。
- ③ 神は眼に見えないもので、祭りの時だけ人里を訪れる。
- ④ 古代日本では、かなり後まで、社殿はなくて、神事は野外の神木や磐座の前を祭場として、露天で挙げるものであった。
- ⑤ 偶像崇拝は行われず、仏教や道教の影響を受けるまでは、日本には神像はなかった。神像の出現は平安時代に入ってからのものである。

ざっとこのようなことが、神道の前身—日本の古代宗教の特色、伝統であったと考えられます。古代以来の祭りの姿を今でもキチンと伝えているのは、賀茂のお社だけではないでしょうか。

### 3 賀茂の社殿—流造

それでは賀茂のお社では、古代の祭りはどのような場所で伝えられていたのでしょうか。先ず中心となる、ご社殿の問題—建築のことから、考えてみようと思います。賀茂社独特の建築様式—流造といわれるものについて、考えていることとお話します。

さきほど古代日本には神を祭る建物はなかったと申しました。伊勢神宮や出雲大社など朝廷と関わりの深い、少数の大きな神社では、奈良時代ごろにはすでに社殿が建てられていたことが「日本書紀」などの記述からもうかがえます。しかし、大和の大三輪神社や石上神宮のように、朝廷と関わりの深い、しかし由緒のある大社でも、かなり後ののちの時代まで社殿建築がなかったという例はいくつも見られます。

まして村々のお社では、社殿のない神木や磐座の前の空き地だけの祭場、というお社は現在でも各地に残っておりまして、私も何度か見たことがあります。

『万葉集』には「ヤシロ」という言葉はありますが、それはいずれも野外の祭場のことであって、神社建築の存在をうかがわせるような記述は皆無です。

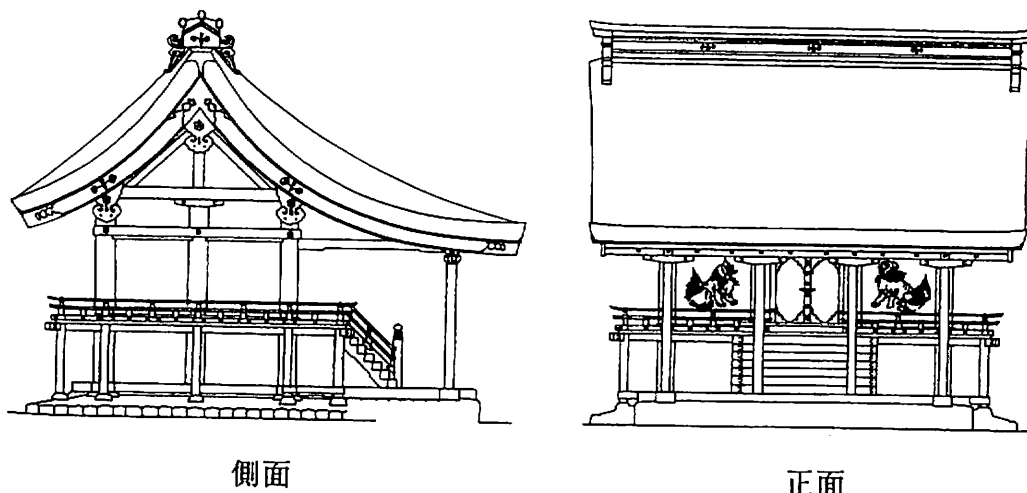
賀茂神社の場合も、奈良時代末までの社は、森の中の拝所から北方の神山を遙拝するものであったと思われます。

はっきりと社殿が建てられたという記録があるのは、『続日本紀』に桓武天皇が山城国の長岡京に都を遷した時（延暦3年<784>11月）に、

「使いを遣わして賀茂下・上二社、及び松尾・乙訓社を修理せしむ」

とあるのが最初であります。なお、ここに「修理」とあるのは、現在使っているような、「修繕」の意味ではありません、古代の用語では、新造の意味であったことが近年明らかにされています（西宮一民氏説）。そのことから、私は延暦3年以前の賀茂神社には、神聖な神の宿る森とその中の祭場はあったけれど、常設の社殿建築はなかったのではないかと。つまり大和の大三輪神社が社殿がなく、神体山を直接拝む形をとっているのと同じような形式の、神山の拝所ではなかったか、と考えています。

図1 賀茂別雷神社本殿



下・上の賀茂神社のご本殿の形式は、「流造」(ながれづくり)と呼ばれております。ここで図1を見ていただきます。(この図は『神社と霊廟』小学館刊一からとりました)。この図のように、流造の様式は、もっとも広く見られる、「お宮」らしい建て方であります。流造の特徴も箇条書きにしてみますと、次のように整理できましょう。

- ① 切り妻・平入りで、母屋の正面に長い庇(ひさし)が付き、前面の屋根が広く前に延びた形になっていること。
- ② 正面の柱の間隔の数により、一間社、三間社、五間社などがあるが、賀茂の両社の本殿は三間社である。
- ③ 母屋(本殿)の床は高く造られている。
- ④ 周囲に縁や高欄をめぐらせたものが多い。
- ⑤ 前方に長く延びた「ひさし」は、この様式の大きな特徴であるが、正面の階段の上を覆っており、階段の最上段が神饌などを供える「大床」(おおゆか)、一番下の段が神職が着座し祝詞奏上などを行う「浜床」(はまゆか)と呼ばれるものになっていること。つまり、長い「ひさし」は、祭場となる階(きざはし)を風雨から守る機能をもって作られているのである。
- ⑥ 原則として本殿内は祭神だけの空間であり、神事中は人は神職も立ち入れない。  
(一部『神道史大辞典』を参照)
- ⑦ 社殿内部には「人」(神職ら)は入らないことが前提であるから、ここには窓がない。

二つの賀茂神社の本殿の流造の特徴を要約すれば、おおまかにいって以上の7項目を挙げる事ができます。

このような神を迎えるための常設の施設が出来たということは、祭の日だけ神木や磐座の前に仮設する露天の作り物(現在も近畿各地の宮座行事などに見られるワラ・カヤ・杉葉で作るオカリヤの様な)に神を迎えた時とは、祭りの形だけでなく、神観念にまで大きな影響を及ぼしたことでありましょう。

それは神社の歴史の上で、画期的な出来事でありました。神社建築の出現はいくつかの地域ごとに、それぞれ個性的な形式をとって現われたことと思われまふ。それは現在見るような多様な神社建築の形式を生んだと思われまふ、それはおよそ奈良時代から平安時代にかけて、各地で次々と起こったことでありまふ。

賀茂神社の流造が神社史の上で重要な意義を持つ点は二つあります。その第一は、祭場になる「階」(きざはし)の上を庇(ひさし)が覆う設備が出来たことです。つまり雨天でも祭儀が挙行できるようになったことです。

もう一つは祭りごとに、神を迎える設備が、その度ごとの臨時のものから、恒久的な建造物へと、古代の祭儀は一般に露天の祭庭で挙行されるものでしたから、雨天の祭儀は大変な苦勞を伴います。それは雨天の葵祭本殿祭を思い浮かべて頂ければお分かりと思いまふ。雨傘のなかつた時代ははなおさら大変だったでしょう。

流造社殿の出現は、古代祭儀の上で画期的なことだったと思います。雨天でも、最低限の神事（献饌と祝詞奏上）が可能になったのですから。

第二点は、中世以降の流造の全国的普及のことです。全国の大半の神社建築にこの様式が、つまり、国の神社建築の大部分の社殿が流造の様式をとっていることであります。

神社建築の様式にも全国では、伊勢の神明造もあれば、出雲の大社造もある。大和の春日造もある。その他にもさまざまな社殿様式がある中で、国宝・重文指定の神社建築では過半数を占めるのが流造であります。（神社建築史の黒田龍二氏によれば、室町後期以前の66%）。指定文化財以外の一般の神社建築では、さらに高い比率でありましょう。

恐らく桓武天皇の時の延暦3年の賀茂社造営に源流をもつと思われるこの様式が、北は出羽の秋田から南は九州鹿児島まで、中世までに普及していたのです。

山城の賀茂神社の流造の様式が、どのようにして全国の神社建築の基準となったのか、その理由の解明はこれからの課題でありましょうが、いくつか複合した理由が考えられましょう。

そのうちの大きな要素の一つとして考えられることは、第一に、先にのべたこの建築様式の出現によって、雨天の祭儀が可能になったことがあるでしょう。

第二の理由として考えられるのは、賀茂社領の鎮守社のことです。平安時代後期から下上二つの賀茂神社の多くの社領が全国に設定され、それぞれの荘園・御厨の内に、賀茂社の分社が勧請されていったことも、流造社殿の分布が広がる上での、重要な要素となったと思います。

今でも各地の社領の跡地を訪れると、流造の賀茂の「分社」を見ることができます。それらの中には、国の文化財に指定されているような、立派な社殿も見られます。

#### 4 神の領域

次に賀茂神社の「神域」の問題を考えてみます。

「図2」を御覧ください。この図は『日本史小百科』から引用したのですが、もう一つ、上賀茂神社最古の年中の神事覚えである『嘉元年中行事』（鎌倉末期）の記述とも大きな違いは見られません。「図3」の江戸時代後期の『都名所図会』（「ちくま学芸文庫」より）と比較しても、あまり境内地や社殿配置など、平安時代以来の社頭景観は大きな変化はなく存続しているものとみられます。

それを前提に社頭の様子を考えますと、本殿の位置から見て北方に、美しい神山を遙拝する位置に遙拝所としての、上賀茂の森があったのでしょ。この上賀茂の森は、神体山の神山から現在の御本殿を中心とした境内地まで続く、神の森であったのでしょ。今の京都産大から、神域に隣接するゴルフ場までは恐らく聖地として開墾されずに来たのでしょ。米軍の破壊による変貌はいうまでもありません。広大な森がそのまま神域となっている類似の例としては、近江の「老蘇の森（おいそのもり）」（式内社老蘇神社の神体林であった）を思わせるものがあります。常陸の鹿島大社にも広大な森がありました。古代の

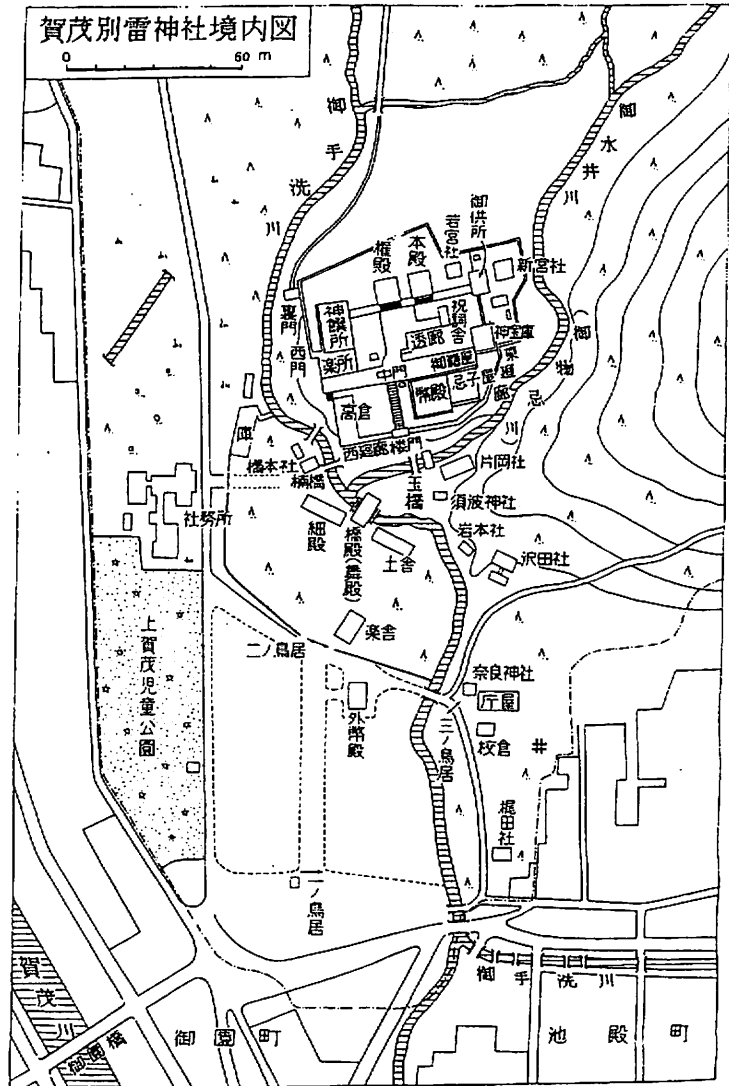
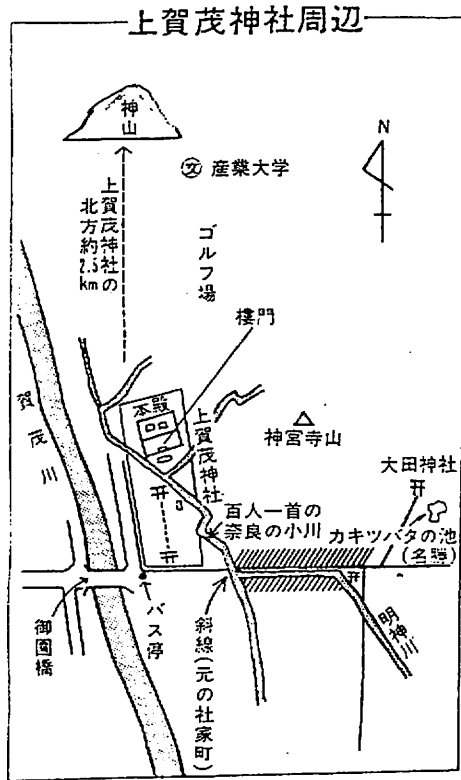


図2 賀茂別雷神社境内図 (『日本史小百科』より)

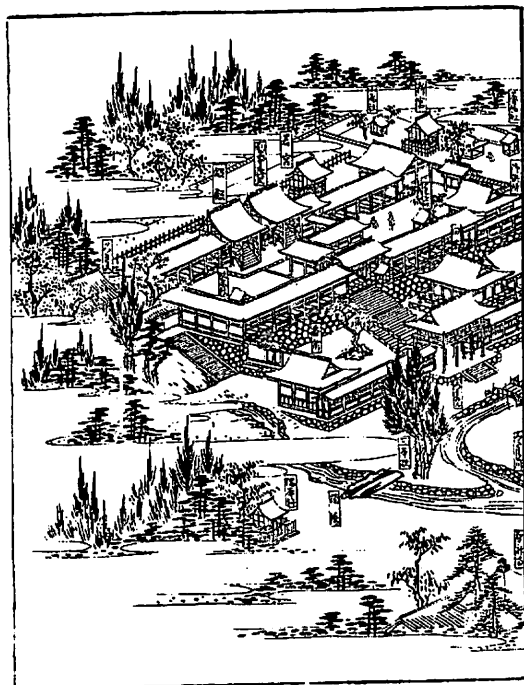


図3 『都名所図会』より上賀茂社



「山」の信仰は、神体山だけでなく、麓の森も、境内地も一体の聖域として捉えることが必要ではないでしょうか。

神山の麓から神社の境内まで、ひとつづきの聖域と考えないと葵祭のミアレ神事が2～3キロも離れた所から神霊を迎えることが理解できないと思います。

神体山と祭場である境内地の中間に、世俗の人の住居や耕作地が混在していたならば、祭の夜の神の移動は考えられないように思います。

祭神が、境内の祭場に出現する機会はもう一度ありました。葵祭当日の本殿祭で、神前に勅使を迎えるときであります。勅使が橋殿に到着し、着座して、御祭文を奏上し、幣物を供えた後、官司は片岡御子社の前の「岩上（がんじょう）」に座って、返し祝詞を奏し、勅使と拍手を交わします。「返し祝詞」は天皇からの言葉（御祭文）に対する、祭神から、聞き届けたという返事です。

この本殿祭の時も、祭神は祭場に来臨しているという前提で神事は進められています。岩上は天然の巖盤の路頭ですが、官司はここに座ることによって祭神の憑依（のりうつり）があったことを象徴した、と考えられます。

賀茂祭には、古代信仰の名残がもう一つ見られます。祭りの場における神の世界と人の場所の境界のことで、今でも賀茂祭（葵祭）の日には、その境界が復活します。

ここで図2を見てください。上賀茂神社の神域の楼門前を御手洗川が南北に流れています。この川に橋殿がかかっています。橋の上に屋根が懸けられた、水上の社殿です。賀茂祭の当日、勅使奉幣の時は、勅使の座はここに設けられます。

勅使の祭文奏上も、幣物の奉納も、また勅使が神祿の葵を受けるのも、すべて橋殿で行われます。先にふれた官司が岩上で奏上する、返し祝詞を勅使が聞くのも、また橋殿です。この神事の最中は、勅使の一行は決してこの川を越えません。この川が神の領域と人の境界であったと見ることができます。

平安時代からしばしば行われた天皇・上皇の賀茂行幸の参拝も、橋殿か、その西隣にある細殿で行われていました（境内図参照）。そうしてみると、現在では賀茂祭の勅使奉幣の当日だけのことですが、恐らくは賀茂行幸が行われていた中世の頃まで、公式にはこの境界線は守られていたのではなかったか。その境界が崩れるのは、京都の秩序が乱れる応仁の乱以降ではないか、と考えております。これもまた、他の神社では失われた、貴重な古代信仰の名残です。もっと類似の例がないか、尋ねてみたいものです。

## 5 宮廷文化と賀茂社の交流

一般の神社には、古来全く見られない、伊勢神宮と賀茂の二つだけの古代の制度は何かというと、誰しものが思い当たるのは、齊王の制度でありましょう。天皇の代替わりごとに、皇女の一人が卜占によって選ばれ、伊勢神宮に派遣した制度です。

奈良朝以前には天皇の守護神としての伊勢神宮だけの制度でしたが、平安時代に入ると平安京の地主神としての賀茂神社にも、齊王の制度が定められます。9世紀の嵯峨天皇の

時からということです。

伊勢と賀茂と、二人の齊王が出現するので区別するために、その御殿の呼び名から、伊勢神宮の皇女を齋宮、賀茂神社の皇女を齊院と呼びます。齊院の皇女は、一人で賀茂の両社に仕えていました。齊院については、近年京都市内で発掘調査が行われています。

伊勢の齊宮は山河を越えた遠方の伊勢の多気郡でしたから、若い皇女たちには淋しい思いをしたことでしょう。しかし、齊院は内裏からも遠くない場所ですから、貴族たちとの交流もあって、華やかな生活であったようです。そのことは平安朝の歌集などからもうかがえます。

賀茂社には、伊勢神宮のような参拝の禁制（私幣禁断の制）もありませんでしたから、摂関家の賀茂詣のような行事もしばしばあり、宮廷貴族と、齊院や社家との間に交流もあったことがうかがえます。

賀茂神社には平安時代以来の宮廷との交渉をうかがわせるような事例も、いくつか見られます。それらの内から、賀茂両社のご神座の問題と、年中行事の祭礼のことを、話題にいたします。

まず、ご神座の問題というのは、賀茂両社の本殿内の御神座の形態のことです。賀茂両社の御神座は、御帳台の形式をとっていることで知られています。御神座は、本殿の奥の御神体を安置する最も神聖な場所です。

御帳台というのは、貴族の寝る所でしたが、平安朝ごろにその形態を整えます。その完備した形態では、台の上に畳を敷き、四隅に柱を立て、天井を張り、四方に絹の帳を張りめぐらせたものです。元々は寝所でありましたが、平安時代には天皇や貴族の常の居所となります。典型的な姿を今も見せるのが、京都御所の清涼殿の北第二間に置かれた天皇の御座です。

古代以来の伝統を持つ神社には、ご神座が御帳台の形式をとるという例をいくつか耳にしますが、宇佐宮や石清水八幡宮の場合は、書物でみた限りでは、清涼殿のものとはかなり様式を異にするようです。ほかには、清涼殿御帳台と同じ形式の神座の存在は知りません。

賀茂両社のご神座が、天皇や貴族の御帳台と同じ形式を採るに至った理由としては、二つ考えられます。一つは下上の賀茂神社が、平安京の時代には、伊勢神宮に次ぐ高い格式を持ち、「賀茂皇太神宮」とよばれるほどになって、祭神の座を玉座に準じた様式に改めるようになったから、と考えられるからです。

もう一つの要素としては、先にも見た宮廷社会と、齊院や社家との交流の中で、貴族文化が神社内陣の調度の形式にまで影響したこと、つまり宮廷風俗の流入によるものではないか、ということとも考えられると思います。

宮廷文化の流入ということでは、宮廷の唐風年中行事が、賀茂社の祭式に影響を及ぼしていることも挙げられます。

平安時代には、前代から続く遣唐使の派遣もあり、また嵯峨天皇の唐風好みもあって唐

文化の流入には著しいものがあり、特に詩文の盛況は、菅原道真などを例に引くまでもなく、顕著なものがありました。

表 賀茂別雷神社の季節と神饌

賀茂別雷神社の季節の祭祀と神饌	
○	印は「嘉元年中行事」所載のもの
	*印は「養老令」(雑令)の節会
○	*一月七日 白馬奏覽神事(白馬節会)——七種の若菜(白馬節会)
○	一月十五日 御粥神事(小正月)——小豆粥とシキミの粥杖
○	*一月十六日 武射神事(射礼)
○	*一月初卯日 初卯神事(初卯)——卯杖
○	*二月二日子日 燃灯祭(子の日の遊び)——根引きの松と燃灯草
○	*三月三日 桃花神事(上巳)——桃の枝とコブシの花
○	五月五日 菖蒲根合の儀(端午)——真菰粽と檜皮粽
○	九月九日 重陽神事(重陽節供)——菊花・菊酒
○	同日 烏相撲

年中行事においても、唐令の歳時・節日の規定が早くから輸入されていたことは、多くの先学の指摘があります。別表の「賀茂別雷神社の季節と祭祀」を御覧ください。ここには上賀茂社の年間の祭祀のうちに、唐の五節供と重なる祭儀がみられます。

五節供とは、唐では次の五つの節日をいいます。

正月七日(人日)      三月三日(上巳)      五月五日(端午)      七月七日(七夕)  
 九月九日(重陽)。

わが国でも、飛鳥時代にはこの風習をとり入れて、宮廷で唐風の行事が行われていたことは、『日本書紀』にも度々見えるところです。

しかし、宮廷でも神社でも、五節供の「祭り」ということはあまり聞きません。ところが、上賀茂神社では、別表(「賀茂別雷神社の季節の祭祀と神饌」参照)のように、これらの日に神事が挙行され、節供毎に季節の花や食物が供えられていました。それは、上賀茂神社に伝える鎌倉時代の『嘉元年中行事』に記載があります。

賀茂神社と同じように五節供に特殊神事があり、季節の花や食物の供饌が行われていたのは伊勢神宮だけです。『皇大神宮儀式帳』をはじめ、伊勢神宮関係の書物にも、同様の記事があり、五節供の神事が行われていたことがわかります。

もう一箇所江戸時代の摂津の住吉大社でも五節供の行われていた痕跡がありますが、その詳細も、古代のことも不明です。

伊勢と賀茂という、天皇の地位とのかかわりの深い二つの大社だけで、節供の神事が挙

行されていたのです。ここにも賀茂神社の特殊性がうかがえます。

以上述べた五節供の祭りは、伊勢神宮と上賀茂神社だけの特殊な神事として明治維新まで続いておりました。ところが維新の新政府は伊勢神宮に制度改革の手を伸ばします。古来、千数百年にわたって神宮の祭祀を守り伝えてきた祭主、大官司、禰宜らの世襲社家は全て追放します。祭神に直接かかわる神饌などの奉仕を続けてきた童女（物忌）の職も廃止します。このような「神宮改革」の嵐の中で、多くの伝統的な祭祀は断絶します。この時に、神宮の五節供の祭りも消滅しました。

現在も季節ごとの花や食物を供えた祭りを続けるのは、賀茂別雷神社だけになってしまいました。これらのご神事は賀茂神社の宝伝統であります。いつまでも伝えていただきたいものです。

## 6 賀茂祭の伝統

賀茂社の祭りは、古代以来の伝統を維持しているものであることは、これまでも申しましたが、賀茂両社の伝統がもっともよく顕れているのは、初夏の賀茂祭（葵祭）であります。歴史の荒波のなかで賀茂祭が守られてきたのは大変なことでした。

祭りが伝承されるのには、行事の継続が欠かせないことです。一般に賀茂祭は、応仁の乱以後約二百年断絶していたといわれていますが、断絶した賀茂祭がどうして復活できたのでありましょか。

賀茂祭の儀は、いくつかの行事の総称です。その細かい内容は、大きく別けて、天皇を中心に宮中で行われる「宮中の儀」。勅使一行が御所から出発して下・上の賀茂神社に向かう道中の「路頭の儀」。それと並行して両神社の本殿で、神職によって祭神に祭典の開始を報告して挙行される「本殿祭」。勅使らが社頭に到着して天皇からの宣命（祭文）や幣物を神前に捧げる「社頭の儀」。このような行事であります。

現在、観光的に注目されているのは路頭の儀ですが、いうまでもなく、神事として重要なものは本殿祭と社頭の儀です。宮中の儀は、明治初年の東京遷都以後は行われていません。

これまで、賀茂祭（葵祭）は、応仁元年（1467年）を最後に、元禄7年（1694年）の再興まで、中断したとされています。しかしこの間にも、両神社において本殿祭と社頭の儀は神職たちだけで続けられており、宮中の儀も、『お湯殿の上日記』や公家の日記には、「賀茂御内祭」として継続していたことが記述されています。

賀茂祭が中断したといわれるのは、勅使の発遣だけだったのです。以前ある研究者の蒐集した上賀茂の社家の文書を拝見したことがあります。それはちょうど、勅使発遣が中断していた江戸初期の文書でした。「岡田さん、こんな史料がありますよ」と見せられたのは、本殿祭や社頭の儀の祭場の覚え書の冊子でした。そこには祭場の略図に、諸役の人々のそれぞれの神事中の行動が墨の線で示されていました。

勅使の参列が中断していた時期にも、社家の人々は二百年にわたって、このように神事

の伝統を守り、継承していたのだとひしひしと感じました。元禄 7 年に賀茂祭が再興できたのは、社家の人々のたゆみない賀茂祭継承の努力があったからこそと思いました。

今お話した、賀茂神社と宮中の内部では、戦乱期にも賀茂祭が中断せずに継続していたという事実は、最近同志社大学の山村孝一氏の研究で明らかになったことです。

## 7 近代の賀茂祭の役割

明治維新の神仏分離の嵐と社家の一斉追放によって、多くの古来の神社も何らかの打撃を受けました。賀茂の社家たちも殆どが神職を離れました。大社の場合、社家のあとには内務省の任命した、旧武士や勤王の志士であったような人たちが神職となります。神職のことを「神官」というのは、この時から官僚として扱われたからで、新しい言葉です。

明治政府は「祭政一致」をスローガンとして、天皇中心の国家建設を進めます。いわゆる「国家神道」です。ここで神社も皇室との関係などを基準に、官幣社・国幣社・府県社・郷社などの等級に分けられ、神職も任命制の官僚となります。

この時に、極く少数の大社だけ、大祭の時、天皇からの勅使が幣物をもって派遣されることが定められます。これを「勅祭社」といいます。

問題は勅祭社の多くは、樞原神官や平安神宮のように明治になって創出したところや、仏教寺院であったところ（八坂神社や北野天満宮）もありました。そこで統一した祭式によることが必要になります。天皇の祭として新しい「勅祭」の基準に選ばれたのが賀茂祭でありました。平安京以来、天皇とのかかわりが深く、祭式も最も古い様式を伝えていたこと。その上、昔から勅祭として続けられていた伝統も考慮されたのでしょう。

明治維新後、政府の命令で、しばらく中止していた賀茂祭は明治 17 年（1884 年）に再登場します。勅祭だけでなく、府県社以下の神社でもこの形式に改めたところが少なくなかったようです。明治以後、皇居が東京に移った後も、賀茂祭が続けられている背景にはこのようなことがありました。

この機会に、最古の賀茂のお社の祭りを守り続けてこられた、賀茂県主同族会のご先祖の方々の労苦を偲びたいと思います。